

裏少女は
淫
花

のどろち孕ませ
動画研究







「もつと強くならなくちゃ……。宮水さんと全国に行くって約束したんだからっ！」

そう決意して飛び込んだ一軒の雀荘。

しかし、この雀荘に入った時には満ちあふれていた自信が、嘘のように溶けてしまった。これで6連敗……

しかも私1人を狙い撃ちするような打ち方。そしてこの妙な強さは一体……？

「こんなことって……確率的にもありえませんか……まさか、イカサマ？」

でも自動車だから、積み込みはできないはず。この状況でイカサマができるとしたら、私は思い切って上家の男の手首を掴んだ。ニギっていた牌がこぼれ落ちる。

「やっばり、自分が有利になるように、牌をすり替えていたんですね」

「ちっ……」

「では、これまでの試合は無効ということになりますね」

「お嬢ちゃん、知らないのかい？この裏世界じゃイカサマはやった方よりやられる方が悪いんだぜ……」

「なっ！ 私は認めませんよ、そんな……不正を正当化するだなんて」

「悪いね。ここにはこのルールってものがあるんだよ」

「おうおう嬢ちゃん！ 負け分きっちり耳揃えて払ってもらおうじゃねえか！」

突然スゴみ出す男たち。

これはどの大金、高校生の小遣いで払えるわけがない。

「払えませんか！ こんなめっちゃくちなルール、麻雀でもなんでもありませんから！」

「だったら仕方ないね。フフフ……。金が払えないなら、身体で払ってもらおうか！」

——バチン！

指を鳴らすと、奥から腹の出た中年の男たちが現れ、上半身裸で私に近づいてくる。

「いや、来ないで……こっちに来ないでください……」

「負け分はきっちり返してもらおうぜ。さあ、のどかちゃん、ちやんとお客様に喜んでもらうんだよ」

「お……お客様？」

「まさか麻雀雑誌にも載ってるほどの有名JKに、あんなことや、こんなことしてもらえるなんてな」

「客つてまさか、私がこの人たちの相手を……？」

麻雀で……のはず、ありませんね……
「タツタツタ、さすがに頭がいいじゃないか」
「う……うそ……無理です、絶対無理！……どうして、どうしてこんなことに……」
「助けて……宮水さん……優希……部長おっ……！」
「助けを呼んでも誰もこないぜ、こんな裏世界の雀荘にはなし」
すべてを悟った瞬間、絶望とともに目の前が真っ暗になっていった。



「い、いやあああああつ!!」
「おほほ、見た目と同じですごい弾力だね」
「やめて、そんな手で触らないでください! いや、離して……離してくださいいいっ!

制服の中に隠れて圧迫されていた乳房が、ぼろりと弾けて外気に触れる。

「うほっ、すげえ弾力だぜ!」

「はあ、あああ……だめ……そこは触っちゃ……あう、あつ、はあつ」

「いや、離して……あは、あああつ、おっぱいはだめです……そこは……んんんっ!

「ここは何? もしかして感じちゃうとか?」

「感じてなんか……ん……んんう……ない……」

口ではそう言いながらも、触れられてもいない乳首が何だか切なくって……

「あう、あ、あああ……はう……んぐ……う、ううっ……」

「切なそうな声出しちゃつて、もしかして乳首もいじってほしいのかな?」

ぬるっとした舌が、突起を包み啜え込んでいく。

「だめっ、強っちゃ……やん、あつ、あんっ、んう、うああ、はあああ!」

頭がぼーっとして、何か熱いのが背筋を駆け上ってくる。

それと同時にアソコの奥が痺れてきて……

「ひやあああつ、何かさちやうつ、おっぱいで、アソコの奥うっ、ん、ふううんっ!

「あああ、なんていやらしいコだ。胸だけでイッちゃうのかよ。」

「いいんだよ、そのままイッても、何度でもイッちゃって!」

「はあつ、んあああつ! 宮永さん、私っ、あん、んう、ふわあああつ、

あ、あふあああああああああああつ!……!」

生まれて初めての感覚だった。

一瞬、ふわっとなったかと思ったら、続けてものすごい衝撃が迫ってきて……

「はあ、はあ、はあ……これがイクッて、ことなんですか……

すごい、こんなのって……あああ……」

悔しくて、涙が溢れてくる。でも今は泣けない。

ここで羽みを見せたら、また男たちを調子づかせてしまう。

だがそんな決意を打ち砕くように、男が穿いていたズボンを脱ぎ捨てて言った。

「さあ、今度は俺も気持ちよくさせてくれよ……なっ!」
「いっ、いやあああああああああああああああつ!……!」



「ひゃあつ、あんつ、だめって言ったのに、またあああつ、
……入って、擦れてっ……びつたりしてて……さっきのと全然ちがいます！
「目隠ししてるから感觸はつちり感じるだろ？ やっぱ本物はいいいだろ？」
ああ、もう膣内はぐちよぐちよじゃねえか！」

いやらしい水音がくちゅくちゅと鳴り響き、肉と肉が擦れ合い、
見えなくてもその音を聞くだけで、私の心をためにしてしまう。

「もうため、おかしくなっちゃいますっ！ あん、ああつ、
き、気持ちよくなり過ぎて……感觸がなくなつて、うろうろうつ！」

「いいよ、もっと気持ちよくなつて、そんなのどかちゃんを俺たちはもっと見たいんだ」
——ズブリ。

「あああんつ、またあああつ……！」

トドメを刺すように、また注射を打ってくる。

「いや、こんなに打たれたらっ……本当にだめになっちゃいます！
狂っちゃう、狂っちゃうううう！——ひゃつ！」

いきなり視界が明るくなった。

そして目の前には、手にビデオカメラを持った男が、じつとこつちを映していた。

「え、やだっ……！ それって、撮ってるの！？」

「安心して、今までの様子はちゃんとビデオに収めておいてあげたから」

男たちはさらに興奮を高めたように、ぐりぐりと奥まで腰を打ち付けて
子宮口を小突かれる。

「っん……出……るっ……！」

「やだっ、またビクッてー あ、あ、あ、あつ、くる、きちゃいます！
私も感じてっ、イタッ、イキます、イッちゃいますうう！」

気持ちいいっ！ きもひいいいいい……！」

ドビュッー ドビュドビュッー！ ビュクッ、ビュルー！

「あああああううー！ また出されてるうううっ！ ドロドロの精液がつ、んううっ」

身体は快感に酔いしれてびくびくと震えているが、心は絶望の淵に落とされている。
膣内に出されたことも、そして、そのことに対して大声で気持ちいいと
叫んでしまった自分自身にも……



「ふわあああああつ、しょ、しょはあああああ！ お、おひりいいり！」
「嬉しいだろ？ 3本もチンポ挿えさせてやってるんだからな」
「あちゅ、ちゅるる、ほつきいの、んくっ、ぐ、くるじい、ああうう、しょこは、ほまんこみたいに、ひろがらないでしゅからあ！」

すでに膣内まで茎に侵されていたのか、その苦しさも次第に熱い快感へと変わっていく。

「おかしくなっちゃう、あむう、あ、あむむっ、じゅく、んんうっ！」
わたし、もう……このままじゃ、おひんひんの奥に、はくっ、あうううっ！」

「でも幸せなんですよ？」

「はひ、幸せですう……だから最後は、ここに、ずるっ、じゅるるるるいり！」
「ここいっばい、はむう、あう、ふううんっ……お目にも、苦いの、ください！」

「精液出して欲しいんだ？ オチンチンから出てくるあの汚い精液を！」
「汚いだなんて、はむ、じゅるる、ちゅるるっ、んっ……んく、ちゅっ、ちゅばばっ、熱いの、欲しいです……、んんっ！」

つい数分前の自分には、信じられないような台詞だった。

でもこれが、嘘偽りない本当の気持ち。

あのドロリとした粘液が、今は欲しくて欲しくて堪らなかった。

「うぐ……またきつくなって……っ！」

「んじゅるるっ、んっ、ふふううううっ！ きてください、あ、はああっ、速速なんてしないでいいですから、ここに吐き出してっ、んんーっ！」

「誰が速速なんてするがよ！ お望みどおり出してやるぜ！」
「ふわあああ、うれしいですっ……んくっ、ずるるるるっ！」

早くここにっ、はふっ、んっ、じゃないと、先に私が、はあ、あああああっ！
いっばいオチンチン突かれて、んぶうううっ！ んくうううううっ！

ドビュッドビュッ！ ビュグッ！ ビュルッ！ ドビュッ！

「はむむむっ、んく、んっ……んく……んぶぶぶっ……ん、くちゅ……」
「ちゃんと全部飲み干せよ、お前がおねだりしたんだからな」

「はい、もちろんです……ん……こく……んぶ、はああ……お口もアソコも……んんっ、……お尻にもいっばい……火傷しちゃうそうなくらい、熱いです……」

子宮と直腸へ精液が注がれるたびに、胸の奥が熱く満たされていく。

だがそれだけでは欲求は満たされることはなく、更なる獲物を探し求めていく。

「あぶ、んじゅ……まだこれ、おつきいままですわね、だったらもう一回、いいですよわね」
「ごめんさいね、宮永さん、あなたとの約束は果たせそうにないみたいです……」



「はあ、はあ、だめです……こんなところで、はあああありと」

「おっと、人がこんなにいるっていうのに、そんな声出しちゃっていいのかな？」

「だって、それはあなたたちが、あん、あああつ、だめです、勝手に声つ、うううつ！」

「俺たちはただきつかけを与えてやっただけに過ぎない。今こうやってパイプで感じてる」

「この姿こそが、本当の原村なんだよ」

「はあ、ああ、これが本当の、あああつ、私なんですわね……」

「確かめてみるか？ このまま止めちやつたら、お前はとうなつちやうだろうな」

「それだけは……、認めますから……こんな身体になつちやつたのは、全部私がエッチだからで……、だから抜かないでください、いっぱいご褒美ください」

学校からの帰りの電車の中で原村さんを見つけた。

最近ずっと休んでいただけで、体調でも崩していたのかな？ 顔色も悪くて苦しそうだし、

なんとか人ごみをかきわけ、近づこうとするも、通勤ラッシュの車内はぎゅうぎゅう詰めで、その場から一歩も動くことができなかった。

「いちばん感じちゃうところ……ん……ん……そ……そんなとこばかり、ブルブルしたら……みんなの前で……あう、んんっ……」

「いいぞ、好きだけイッて、それがお前の望みなんだろう？」

「そうですけど、あああ、こんな場所で……公衆の面前で、やっぱり恥ずかしいです」

何かを必死に耐えているみたいだった。

彼女の背後にびったりと張り付くように、男が立っていて、

その手は原村さんのスカートの中に入っていて……

（間違いないよ、原村さん、喉深に漬ってるとんだ！）

ここからでも微かに聞こえてくる、原村さんの吐息……

「ああ、ああ、あつ、ああつ、いい、いいよね……だめなのに、感じちゃう……、またすこいのきちやいます」

「でも本物のチンポの方が好きなんだろう？」

「あ、当たり前じゃないですか、あの日から全然、ここに挿れてくれないんですもの、……焦らしてるんですか？ もう私、欲しくて欲しくて……」

「ククク……おねだりか、さすがにもう我慢できなくなってるようだな、いいだろう、次の駅で雀荘でしたとき以上のものをお見舞いしてやる」

男の口が確かにそう動いたのを、私は見逃さなかった。

（……え？ 雀荘？ この辺りにある雀荘といたら、たしか……）

などと考えていたら、ドアが開き、原村さんと男が一緒になって降りていってしまふ。

急いであとを追おうとするも、人混みに邪魔されて、結局は見失ってしまった。



「はあ、ああ、本物のオナチンチンです……やっと……んちゅ、ちゅる……
 こんなにいっぱい、うれしいです……」

「ただ数日お預けしてただけでこの様かよ、ったく、とんだ淫乱女だな」

「しょうがないじゃないですか、薬だけ注射してくれても、はあ、あう、んっ、
 私はこれでいっぱい可愛がってもらわなくちゃ、れる、ちゅるっ、だめなんです」

何度も自分の指で慰めてはみたけど、あの時のような満足感はまったく得られなかった。
 最初が最初だっただけに、普通のオナニーやセックスなんかじゃ物足りなくなっていた。

「もつと子宮の奥まで、突いて、あ、あつ、そこ、そこがいちばん感じちゃうんですっ！
 久しぶりだから、その分もいっぱい可愛がって、ひゃああああっ！」

「言われなくても可愛がってやるよ、こつちだつて久しぶりなんだからな」

「ああ、そうでしたね、あん、じゅく、じゅるるっ、だったら今までの分も、
 ここで発散しちゃってくださいねっ！」

自ら腰を振り乱し、前後の穴に入ってくる肉棒に秘肉を擦り合わせていく。

「ふああ、あつ、だひてくたしやい、はああつ、ひっばい、ひっばい、んんんっ、
 てほうびくだしやいっ！ ほほほ、いっぱい、あぶつ、じゅるるっ、ちゅるるるっ！」

「いいんだな、出して、本当にいいんだな！ ならこの場所に相応しく、
 お前には肉便器になってもらおうか！」

「はひっ、だして、じゃないと、ふあはしは、んんくうっ、まんじよくなんで、
 でひないんですはう、んんっ、くたしやい、ちゅば、あ、ふううっ」

ドビュッー ドビュッー ビュルッ、ビュルルッー

「ひゃああああつ、あう、ああ、はあああー！ お、奥に当たってりゅううー！
 おなか焼けちゃうー！ おひりのほうにも、うれしい……！ ひあわせれちゃうー！」

欲望の塊である白いものが、私めがけて放出され、目の前に飛び散っていく。

「はふ、んっ、熱いのが、んんうっ……もつともつと出してください、
 私は肉便器ですから、ここに……汚いのいっぱい出して、汚れを落としてくださいー！」

「フフッ、こうして精液ひっかけられてるのを見ると、本当に肉便器だな」

「はい、私は皆さんの精液おトイレですから……だからいっぱいかけてください……
 あう、ちゅる……」

この瞬間が私にとっては最高の時……
 麻痺で相了るのと同じくらい、最高の瞬間だった。

「くん……、うふふ、おいひい……」



「は、原村さん……おかしいよ、もうこんなのもう見てられないよ……、
今すぐ原村さんを返してください！」
「ああ、返してあげるよ、ただし、この対局にお嬢ちゃんが勝つたらね、
でも君が負けた場合は……ワフフ、業しみだねえ」

原村さんを押し返って入った一軒の雀荘。
ようやく見つけたと思つたら、そこには信じられない光景が広がっていた。

「宮水さんっ、あはっ、あああつ！」

気をつけてください、あの人たちはグルになって……はあああああつ！」

「お前は余計なこと言わなくていいんだよ」

「うっ、ううっ……だめっ！力が入らない……急に、奥が痺れてきて、

はあ、あああつ、この感じは、またああつ！」

「ようやく今朝打った葉が効いてきたようだな」

「はあ、あああつ、それって、また私が……！」

「友達の前でイツちまえ、それが最高の術業となつてまたお前を成長させていくからよ」

「いやですっ！宮水さんの前で、あんなっ……あはっ、あああつ、んあああつ！」

負けるわけにはいかない、動つて原村さんを助けないと……！

「よそ見していいのかい？人の心配してる間にほら、ロシ、満貫で8000点」

「そ、そんな……」

「これでお嬢ちゃんは大負けだね」

点棒があつという間に尽きてしまった。それはこの対局での敗北を意味していた。

「どうやら向こうも決着がついたみたいだな」

「あ、あつ、宮水さんっ……あん、んぐっ……んっ……ごめんなさい……、
私も、もう……あ、んあああ……」

體全体が痺れてきて、もう抵抗する力もなくなっていた。

「やだ、なんです、この感じは……今までとちがいます。」

「あ、あつ、はっ、ビリビリってきて、なにか出てきそうですっ！」

「さあ、イクぞー！ここからじゃ丸見えだから、たっぶり押んでもらえ！」

「いやっ、いやいやいやっ、あ、あああつ、すこいのくる、出ちやうっ！」

「いやあああああああああああああ……っ……っ……！」

「ドビュッ、ビュル……ドクドクッ、ドブッ！」

「宮水さん……あああ……ごめんなさい……私のせいで、ごめんなさい……」

「あああ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「あああ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「あああ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「あああ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「あああ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「あああ……ごめんなさい……ごめんなさい……」



「い、痛いよっ、あああ……痛いよ原村さんっ！ いや、いやあああっ！
「ごめんなさい宮永さん、私のせいで、ごめんなさい……」

あの時の痛さは身をもって体験している。
だから宮永さんの気持ちは文字通り、痛いほど伝わってくる。

「らめっ……まだアソコのなか、ヒリヒリして……だめっ、もつと優しく……
やっ、いやっ……強くないで、あうっ、あ、ああ、んあああああっ！
「だったら痛いのが消えちゃう薬があるんだけど、試してみるかい？」
「だめよ！ そんなことしたら宮永さんもっ……」
「でもいいの？ 大事なお友達がこのまま痛い思いをしてても……
「だったら私が気持ちよくさせてあげます……それがせめてもの償いだから……
「あうっ、やだっ……そんなこと感めちゃだめだよ……そこは汚いから……
「ちゅる、んちゅ……でもここ、気持ちいいでしょ？」
「はあ、ああ、よくわからないけど、すごい……んんっ！」
「もつといっぱい感めてあげますね……その痛みが快感に変わるように……
「あああっ、ビリッてきちゃうよ……原村さんどうしよう……
私、どうしちゃうったの……、はあ、ああ、何だか熱くなって……ん……んんっ」

赤い血に凝じって、徐々に愛液も漏れ出してきていた。

「あんっ、ふうりうっ……やっ……痛いの、気持ちいいよ……なんなのこれ……
あ、んっ、さつきから、ジンジンしてきてっ……」

「それがイクッてことだよ、覚えておけ、これからは毎日味わうことになるんだからな」
「イクッて、何ですか……ふわあっ、ああっ、怖いよ、何か来る……」

原村さんっ、助けて、また奥からさちやってるよ！
「大丈夫です、それはすごく気持ちいいものだから……怖くなんてありませんから」
「本当につ？ イクよ、イクちゃううよっ！ アソコがもう、いうこと書いてくれないで、
あ、あっ、んああっ、ふわあああああああっ……」

ドビュッ！ ドビュッ！ ビュルッ！

「あああっ、んぐっ……んっ、んあああ……あ、うあああああっ……
さつきからこれ……私の体内に入ってきてる熱いのって、これってえ……」

「なんだ、本物の精液は見たことないの？ 危険日じゃないことを祈るばかりだな」
「う、うそ……うそだ……うそだよ……う、うう……ふええええええ……」

「おっと、泣いてる暇なんてないんだぞ、まだまだお楽しみはこれからなんだからな」
——チクッ！

「……っ！ 痛っ！」

「……そんな……宮永さんまで……」

とうとう注射を打たれてしまった。

これで宮永さんも、元の世界には戻れなくなってしまう。

……



「あむ、ちゅぽ……原村さん、これでいいのかな……？ん、ふむ、ちゅるる……」
 「嫌なら無理しなくてもいいですからね、宮永さんの分も、私が頑張って吸めますから、
 「だめだよ、そんなの、原村さんにだけ押し付けちゃうなんて……」
 大丈夫、私も一緒に頑張るから」
 「宮永さん……」

「こうすればいいんだよね、ああ、ちゅつ……あううう、でも変な味がするよれ……、
 嫌なのにも……ちゅぶぶつ、ちゅつとだけ、いいかもって思ってたさちやう……」

さっき打ったれた薬のせいで正常な思考が麻痺してしまっている。
 このままじゃ二人とも、いずれはこのオチンチンの病になっちゃう……。

「だめ、なんでですか……また、宮永さんの前で、あんなはしたない姿……」
 あ、ちゅ、ちゅぽ……あ、ふう……

「うわあ、さすが原村さんだよ……おっぱいと一緒になんか服用に吸めちゃうなんて、
 私もちよつと吸めちゃうかな、ふむ……ちゅる、ちゅぽ……あむ……ううう……」

亀頭を舐めまわす宮永さんの唾液が竿を伝い、たまたまさんを啜てる私の口にも
 その滴が入ってくる。

「——やだ、もしかしてこれって間接キスじゃないの？」

心臓が飛び出してくさそうなくらい、ドキドキしちゃってる。
 宮永さんはベニスにキスした状態から、上目遣いでじつとこつちを見つめてくる。

「だめ、そんな目で私を見ないで……あう、んんっ……ふうっ……んぐ……ふううう！」
 「くっ、急に強しく……！このまま……っ！喉奥にぶちまけてやるぜ」
 「ひやあああああああつ！ほんなことはれたら、もう絶対にいっひやいます……」
 もう戻れなくなっちゃいまふうう……

「いいよ、原村さん、私も一緒にいっくから、だから、ね？」
 「宮永さん、あ、はあつ、本当ですかっ、本当に一緒に、どこまでも一緒にいっ！」
 「うん、全国じゃないけど、原村さんとならいつちやつてもいいよ」

ギリギリのところだと思いつまっていたものが、宮永さんの一言で崩れ去っていく。

「くだしやい……私のここに、あなたの精液らひてくだしやいっ！」
 「わ、私も……さっきはオマンコだったから、今度はこっちのお口にもくだしやい！」
 「生憎と俺のこいつはひとつしかないんでね、欲しいなら、その顔にぶっかけてやるよ」

ピュルルルルル……

二人の顔に白濁液が勢いよく飛散して……
 うつとりとしながら、顔から垂れてくる精液を舌で汲み取った。



「赤ちゃんにまで届いてきちゃう、パパの精子が、びっくりりして、起きちゃうかも」「いいじゃないか、パパとママが愛し合ってるところを見てもらえばさ」

「わ、私もご主人様の家族なんだからっ！ 原村さんだけなんてズルイですよ！」

「ああ、わかってるよ、咲も大事な家族の一員だ」

「だってさ、原村さん、聞いた？」

「もちろんですよ、宮永さんは私にとっても、ご主人様と同じくらい大好きだから」

「うれしい……幸せだよ！」

「宮永さん……ん……ちゅっ♪」

「あんっ♪」

気がついたら唇を押しつけていた。

宮永さんと家族になれたのがうれしくて、こうすることでした。

その気持ちを表現することができなかったから。

「好きよ、宮永さん……あう……ちゅる……」

「でも嬉しい。初めてのキスが大好きな人とだなんて……」

「例えばこれが、私にとって初めてのキスだった。」

「つまりはフリーストキスで、まさかこんな形で奪われちゃうなんて思いもしなかった。」

快感とはまた別の興奮が押し寄せてくる。

胸の奥につかえていたものが一気に開放され、代わりにポカポカとした温かい感情が

その隙間に入り込んでくる。

「一緒に麻雀で全国に行こうって、その約束は果たせなかったけど……」

「こうしていつまでも一緒に居られるなら、それだけでもう十分だ。」

（宮永さんとならどこまでも……）

「ああっ……愛されてるの、伝わってくる……心も身体も、みんな繋がってるって……」

「家族なんだって……あ、ああっ、こんな気持ち久しぶりだよ」

「そう言っただけで宮永さんの目には、うっすらと涙が浮かんでた。」

「お母さんとお姉ちゃんがいた。あの時と同じっ、これからは家族みんなで……」

「仲良く暮らしていこうね……」

「はい……もちろんです……」

生まれてくるこの子たちと、いつまでも一緒に……」



復讐のピカレスク美少女ADV
5月リリース予定

リザイン

RESIGN



↑「リザイン」よろしくです！
そろそろ最後の仕上げ中！（ここが大事）

裏雀荘二咲ヶ花

のどっち孕ませ動画研究
同人誌版

あとがき

のどっち可愛いですよ〜。咲もカワユス、二人がめちゃくちゃにされたらさぞエロ可愛かろう、と思っていてもたってもいられず企画した作品の同人誌版です。

駅のトイレで輪姦、とかパニー服で調教、とか、やりたいシチュを堪能しましたですよ。あと和の魅力は敬語っぽい口調にもありますよね！ ね！

シャーベットソフト / 代表 雪白イマ
URL - <http://www.sherbetsoft.com/>

印刷・コーシン出版

禁無断転載・複製・複写
2010/4/29 発行

SBT-105



この同人誌は同人ゲーム「裏雀荘ニ咲ク花」をフルカラー同人誌形式に編集したものです。

2010 シャーベットソフト